

(報道発表資料)

独立行政法人国立国語研究所

「病院の言葉」を分かりやすくする提案(中間報告)

趣旨

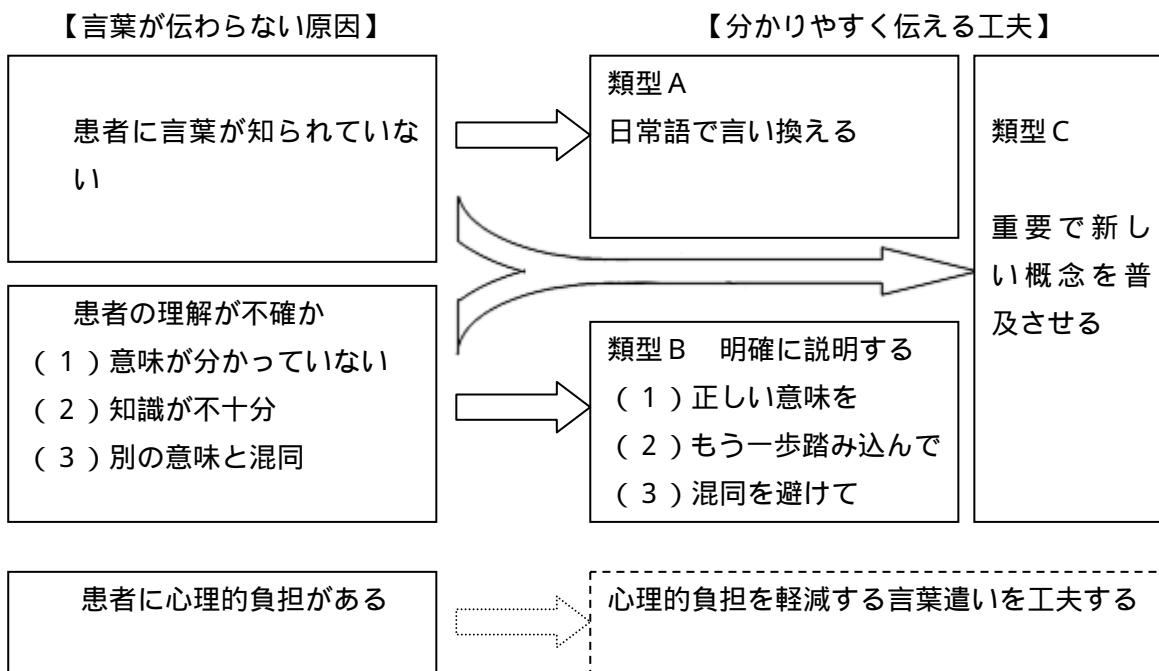
患者中心の医療が望ましいとの考えから、病院などの診療では、病状や治療法などについて医師・看護師など医療者が十分に説明をし、患者がそれを理解し納得した上で自らの医療を選択することが求められるようになりました。ところが、医療の専門家でない患者は医療者の説明に使われる言葉が理解できないことがしばしばあり、自らの責任で医療を選択することが難しい現状があります。

患者にとって病院の言葉が分かりにくいことにはいくつかの原因があり、その原因に応じた対策を、説明する側の医療者が工夫することが望まれます。国立国語研究所では、病院の言葉の分かりにくさの原因を分析し、その改善のための具体的な方策を検討し、検討の結果を医療者に対して提案する準備を進めてきました。平成 19 年 10 月に「病院の言葉」委員会(委員長:国立国語研究所長・杉戸清樹)を設置し、医療の専門家と言葉の専門家とで検討を重ねてきました。このほど、その「中間報告」をまとめましたので発表します。中間報告に対して、各方面から意見を募集します。

委員会の名簿、設立趣旨、活動の経過、調査結果などは、次のホームページに掲載しています。中間報告の全文も掲載しています。 <http://www.kokken.go.jp/byoin/>

「病院の言葉」を分かりやすくする工夫の類型

検討は、いくつかの調査を実施して客観的なデータを得ること、得られたデータをもとに委員会で議論することを通して進めてきました。検討の結果、言葉が伝わらない原因には三つがあり、それぞれの原因に応じた工夫を行うのが効果的であるとの結論に達しました。原因と工夫の類型を図式化すると、次の通りです。



三つの原因のうち、患者に言葉が知られていない場合は、日常語で言い換える（類型A）、患者の理解が不確かな場合は、明確に説明する（類型B）、という工夫が有効です。そして、このうち、新しく登場し今後の医療にとって重要になる概念については、一歩進んで、概念を普及させる工夫を行うことも望まれます（類型C）。なお、原因の三つ目である、患者に心理的な負担がある場合は、個々の言葉を分かりやすくする工夫とは別に、不安の軽減のための言葉遣いの工夫を検討すべき課題であると考えました。

類型別の工夫例

この提案では、類型A・B・Cそれぞれについて、各類型を代表できる言葉を取り上げ、医療者がどのように伝えれば患者にとって分かりやすいのか、具体的な工夫の方法をまとめました。各類型で取り上げた言葉は、全部で57語です。取り上げた言葉の数は必ずしも多くありませんが、どれも問題がある大事な言葉です。

類型A：日常語で言い換える

認知率が低く一般に知られていない言葉。

できるだけ使わないようにし、日常語を使って言い換えることが望まれる。

イレウス、エビデンス、寛解、誤嚥、重篤、浸潤、生検、せん妄、耐性、予後、ADL、COPD、MRSA（13語）

例：イレウス

・「イレウス」という言葉は使わず、「腸閉塞」などと言い換える。

類型B：明確に説明する

認知率は高く一般に知られているが、理解されていなかったり、知識が不確かだったり、混同されたりする言葉。

正しい意味が理解され、確かな知識を持ってもらい、混同が起きないように、明確に説明することが望まれる。

（1）正しい意味を明確に説明する

認知率は高く一般に知られているが、理解率との差が大きく、理解されていない言葉。

正しい意味が理解できるように、明確に説明する必要がある。

インスリン、ウイルス、炎症、介護老人保健施設、潰瘍、グループホーム、膠原病、腫瘍、腫瘍マーカー、腎不全、ステロイド、対症療法、頓服、敗血症、メタボリックシンドローム（15語）

例：炎症

- ・「炎症」と言うだけでとどめず，生体防御反応の仕組みを理解してもらえるように，例えば次のように説明する。「からだに侵入して悪さをする細菌やウイルスと，からだを病気から守る働きをする白血球が戦うと，赤くなったり熱を持ったりする炎症が起きます」

(2) もう一步踏み込んで明確に説明する

認知率・理解率ともに高く大体の意味は理解されているが，からだや病気の仕組みなど知識が不確かな言葉。

確かな知識を持ってもらえるように，一步踏み込んで明確に説明する必要がある。

悪性腫瘍，うっ血，うつ病，黄だん，化学療法，肝硬変，既往歴，抗体，ぜん息，尊厳死，治験，糖尿病，動脈硬化，熱中症，脳死，副作用，ポリープ（17語）

例：糖尿病

- ・まずは，「高血糖が慢性的に続く病気」「高血糖症」などと説明。
- ・時間のある場合は，「血液の中には，からだに必要なエネルギー源であるブドウ糖があります。ブドウ糖がからだで処理できない濃度になるのが糖尿病です。治療せずにいるとほかの重大な病気になります」などと，明確に説明。

(3) 混同を避けて明確に説明する

認知率は高く言葉はよく知られているが，日常語の意味と異なっているために，意味の混同が起きやすい言葉。

混同を避けて明確な説明をすることが必要である。

合併症，ショック，貧血（3語）

例：合併症

病気の合併症の場合

「ある病気が原因となって起こる別の病気」と説明。

手術や検査などの合併症の場合

「合併症」「手術合併症」「検査合併症」は使わない。

「併発症」または「手術併発症」「検査併発症」と言い換え。

類型C：重要で新しい概念を普及させる

認知率が低かったり、理解率が低かったりする言葉の中には、新しく登場した重要な概念を表し、今後普及が期待されるものがある。

重要で新しい概念を普及させる工夫が望まれる。

インフォームドコンセント，セカンドオピニオン，ガイドライン，
クリニカルパス，QOL，緩和ケア，プライマリーケア，MRI，PET
(9語)

例：QOL（クオリティーオブライフ）

- ・現状では知られていないが、医療や介護の現場で患者が今の生活の満足度を一言で表現するのに最も適切な言葉であるので、普及が望まれる。
- ・「その人がこれでいいと思えるような生活の質」などのような分かりやすい言い換えや言い添えを行うことで、「QOL」という言葉を普及させたい。

中間報告への意見公募

中間報告への意見公募を行います。寄せられた意見は、最終報告をまとめる際の参考にします。

意見募集期間：平成20年10月21日（火）～平成20年12月1日（月）

意見提出方法：

- (1) アンケート用紙に記入して送付（中間報告書冊子の送付先に同封）
- (2) ホームページの「意見公募」のアンケート欄に記入
<http://www.kokken.go.jp/byoin/>
- (3) 電子メールを送付
byoin_iken@ga.kokken.go.jp
- (4) 郵便で文書を送付
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2 国立国語研究所「病院の言葉」委員会
- (5) FAXで文書を送付
FAX 042-540-4333（代表につき、あて名に「病院の言葉」と明記してください）

今後の予定

- 平成21年3月 「病院の言葉」を分かりやすくする提案（最終報告）発表
国立国語研究所のホームページで公開
- 平成21年3月ごろ 「病院の言葉の手引」（仮称）刊行
医療者が実際に使うことができる手引を市販本として刊行

本件についての問い合わせ先

国立国語研究所 研究開発部門 言語問題グループ長・田中牧郎
電話 042-540-4514 電子メール mtanaka@kokken.go.jp